

1990年代以降のアメリカのアジア研究

——研究と実践に携わるものの目からみて——

トンチャイ・ウィニッチャクン（佐藤幸人訳）

アジア研究は変化のさなかにある。「地域研究」の時代にあった、アジア研究のかつての基本的な条件は失われ、新しい条件が生まれている。このエッセイではアカデミズムや知的考察を超えて、地政学的条件の変化、そしてそれがこの20年間にアメリカのアジア研究に及ぼしてきた影響を概観する。研究と実践に携わるものの目からみた観察であり、官僚や政治家のものではない。

●新旧の地政学とアジア研究へのインパクト

アジア研究は最近まで、ヨーロッパのオリエント学とアメリカの「地域研究」の影響のもとにあった。ともに「アジア」という概念を有し、それぞれ植民地支配と冷戦における必要性に対応した主題や方法に重点を置いていた。古代文明に敬意を持つ植民地主義のもと、オリエント学は哲学、碑銘研究、考古学、美術史、古代史、古典文学に関心を向けた。アメリカの地域研究は、反乱への対策と経済の近代化に必要な知識へのニーズに応えるものだった。それは社会科学および関連する人文科学、すなわち政治学、人類学、近現代の歴史と文学に傾斜していた。

オリエント学における「アジア」という概念は、「アジア」という地域での植民地事業によって形作られていった。一方、アメリカの地域研究における「アジア」は、主としてアメリカの観点からみた冷戦期の地政学によって形成されることになった。そこで国民国家に焦点が当てられたのは、国際政治に基づいていたからである。過去のアジア研究における知識生産の文脈はこういったものだった。とはいえ、このことはアジア研究がそういった帝国主義的な課題に直接的に寄与したとか、そのためだけに役立つものだったとかということの意味しているわけではない。

冷戦の終結、グローバル化、そして多様な新しい地

域主義は、今日のアジア研究にとって、これまでとは違った条件となっている。「アジア」という概念と、アメリカの視点に基づく地域の分割は挑戦を受けている。国別の研究は依然として強固だが、方法論的ナショナリズムは厳しい批判を浴びている。経済的なグローバル化との間に軋みが生じているだけではなく、自然災害やテロリズム、流動化する文化と情報といった越境現象を扱うことができないという限界がますます明白になってきているのである。地域研究全体の再考、とりわけアジア研究の空間の再考は近年の流行となっている。その上、アジアは多くの面で存在感を増している。アジアの高等教育はこの20～30年間に急激に拡大し、研究者の数は増え、その研究成果の大部分は、それぞれの国に関するものである。

●知識を生み出す場所と担い手の変化

この20～30年間のアジア研究の基本的な変化は、知識を生産する人と場所において生じている。アジアはかつて、「北」の世界にとってフィールドワークをおこない、インフォーマントや現地のパートナーの研究者がいる場所にすぎなかった。アジア研究の研究者のネットワークは、ヨーロッパと北米にあった。そしてそれだけだった。しかしながら、最近ではアジアに拠点を置くアジア研究の新しいプログラム、新しい学術誌、そして研究者組織が増え、活発に活動し、広く知られるようになっていく。自国以外のアジアの国や地域を研究する、アジア各国のプログラムや研究者もまた目にみえて増えている。多くのアジア研究のネットワークが世界中で急速に組織されている。とりわけ欧米の研究者とアジアの研究者の間、およびアジア内でのネットワークの形成が顕著である。

知識の生産者が主としてアジアの外、特にアメリカにいるということとはもはやない。アメリカのアジア研

究は徐々に新しい知識生産の姿に適応してきている。知識の主体と客体といった、西側とアジアの力関係もまた変わりつつある。しかもアメリカでは、多数のアジア人とアジア系アメリカ人がこの分野に参入している。彼らは西側の視点から他者としてアジアにアプローチすることはない。

●アメリカのアカデミズムにおける知的な挑戦

1980年代までの地域研究が研究の基本的な単位としていたのは、アメリカの地政学から導き出された、国民国家およびかなり柔軟性を欠いた地域区分であった。1990年代、冷戦の終結とグローバル化によって、地域研究の空間的な前提は疑問を投げかけられることになった。方法論的ナショナリズム、つまり国民国家と恣意的に設定された地域を無批判に研究の基本的な単位とするあらゆる方法に対して、批判的な見方が増大していった。批判は地域研究者自身の間で広がり、さらにそれを超えて拡散していった。制度的には、地域研究のプログラムが疑問視されるいっぽう、グローバルな問題と方法に対する関心が高まり、新しいグローバルスタディーズのプログラムがアメリカ中で設置されるようになった。

この間、社会科学と人文科学における知識の一分野としての地域研究は、知的な挑戦を受けることになった。アメリカの社会科学の主な分野（経済学、社会学、政治学）は、実証的なデータセットつまり「ビッグデータ」に基づいて科学的であろうとしたが、その裏返しとして地域研究は非科学的な知識であるという批判が生まれた。こうしてこれらの分野における地域専門家の募集は減少し、ついにはなくなってしまった。それは大学院生等々の養成にも及ぶことになった。このことは、世界の他の地域に関する知識の生産が減少したことを必ずしも意味するものではないが、アプローチ、方法、公共のニーズ、資金の調達等々の点で、知識の「形態」のシフトが生じることになった。

このような2つの要因に加えて、過去30年、高等教育は深刻な財政危機につきまといわれることになった。こうした財政状況のなかでは、地域研究およびアジア研究はアメリカのほとんどの高等教育機関において、中核的な使命とみなされなくなった。それは他の要因以上に、アジア研究を含む地域研究を恒常的に脅かすことになった。

●人文分野に接近するアジア研究

絶えず財政問題を抱えながらも、アジア研究はこういった困難に耐えて生き残ったばかりでなく、依然として力強くかつ知的であり、研究プログラムとして存続している。

知的という点では、社会科学において地域研究は挑戦を受けることになったのに対し、人文科学では1980年代後半以降、「言語論的転回」が強い潮流となった。刺激的な新しい概念や方法によって、人文科学は強化された。それ以来、歴史学はより人文科学に近くなった。コミュニケーション学や社会人類学・文化人類学もそうであった。過去20年のアメリカにおけるアジア研究もまた人文科学に接近している。それを示すものとして、経済学、社会学、政治学をバックグラウンドとするアジア学会（Association for Asian Studies）の会員は、この20年の間に着実に減少している。現在では会員の主要なバックグラウンドは歴史学、社会人類学・文化人類学、言語学、文学、宗教学である。

科学とその方法論における普遍的な主張と比べた場合、地域研究固有の学術的な貢献は、特定の文化や言語の会得によって知識を獲得することにある。地域研究における社会科学的な研究においてさえ、ある社会に特有の文脈の重要性は認識されている。それには人間科学の構成要素として文化を理解することが含まれている。地域研究は科学的でありうるが、それが生み出す知識は、恐らく歴史学や宗教学と同様に、科学の領域にのみ収まりきれないものではない。

●チャレンジを超えて

アメリカの地域研究が終焉を迎えるのではないかという懸念とは裏腹に、2000年代前半にはグローバルスタディーズからの挑戦は収束していった。グローバルスタディーズと地域研究はお互いにそれぞれの重要性和価値を認め合っている。

指標として、地域研究における研究と言語コースの主要なプログラムである、ナショナル・リソース・センター（National Resource Centers）をみてみよう。教育省から資金を獲得するために審査を受けるので、その数はより広い学界での地域研究の浮き沈みを反映している。ナショナル・リソース・センターは学位を授与し、「各地域研究の拠点」として知られている。表1からわかるように、その数は2000年代に入って現

在までの期間中、かなり安定している。しかしながら、20年間の減少、また幾つかの地域について、時期は異なるものの減少がみられることは、国や機関のレベルでの財政危機を反映しているのだろう。それはこの間のアメリカ高等教育につきまとしてきた問題であり、地政学的な変化あるいは地域研究に対する知的な評価の低下によるものではない。

しかも、表1からは地域研究の全体像の一部しかわからない。第1に、教育省は数百の学位をとみなわない言語研究のプログラムや、1990年代に始まった数十の国際ビジネス教育などにも資金を供与している。第2に、幾つかの例を挙げると、グローバルな安全保障、世界経済、国際医療といった関連した領域でも、多くの地域研究がおこなわれている。さらに、外国の政府が地域研究に資金を提供することも増えている。たとえば2004年以降、孔子学院の数は世界中で急速に増加している。時に大学運営に介入しようとする姿勢が議論を呼んでいるにもかかわらず、アメリカだけでも現在では110の孔子学院が大学に設置されている。そのほかにアメリカの高校には500以上の授業がある (http://english.hanban.org/node_10971.htm 2017年12月5日アクセス)。

●変わるアジアの定義

しかし、アジア研究は適応を求められている。適応を顕著に示すのは、研究対象としている地域の定義の柔軟化である。国民国家はもはや想定されていない。アジアは一枚岩の土地ではない。アジア研究の空間は、研究する主題に応じて多様になっている。新しい地域主義が台頭している。国民国家にわたしたちの思考が抑え込まれなくなると、アジアの空間と時を跨いだ文化のおよび精神的なつながりがみえてくる。

アジアを再考するなかでは、インド洋や南シナ海といった海のネットワークやコネクティビティが強調されている。経済生活、気候条件、商品流通を共有する幾つかの区域として、アジアをみることができる。アジア研究者もまた、わたしたちが学んだ歴史の多くが低地文明のものであって、高地は無視されてきたことを理解するようになった。

過去20年における最も生産的な研究分野は境界研究

表1 教育省から資金を獲得したナショナル・リソース・センターの数 (2000～18年)

地域／予算期間	2014～ 18	2010～ 14	2006～ 10/11	2003～ 06/07	2000～ 03/04
東アジア	16	21	19	16	17
南アジア	9	10	12	14	15
東南アジア	9	8	9	8	9
中東	16	20	17	18	15
アフリカ	11	16	14	12	15
ラテン・アメリカ	20	24	24	24	29
合計	81	99	95	92	100

(注) 資金の配分は4年ごとに教育省によって決められる。しかしながら、各期の終わりはステータスや機関によって異なる。この表には3～4のアジア研究を結合したセンターや、「国際的」研究および「グローバル」スタディーズのセンターは含まれていない。

(出所) アメリカ教育省ウェブサイトの「外国語教育」より作成 (<https://iris.ed.gov/iris/ieps/search.cfm>; keyword: NRC; accessed 4 December 2017)。

(border studies)、つまり国境を越える現象や問題の研究である。それにはエスニックマイノリティとその居留地の国境を跨いだ広がり、密輸や国境貿易、移民や難民などの人の移動、大衆文化や情報の国境を越えた流通などが含まれる。トランス・アジア研究は今日のアジア研究の流行である。アジアについての単一の、柔軟性を欠いた概念は、複雑かつ相互に絡み合っている主題を研究するのに適していない。

●展望——新しい挑戦——

わたしたちは新しい地政学的状況に置かれるようになり、それはアメリカのアジア研究に影響を与えている。一面ではトランプのナショナリズムのインパクトがある。それは一時的なものであって、実質的な結果をとまなうことはないのだろうか。どの程度、学界に影響を及ぼすのだろうか。予算のさらなる削減や学術上の優先順位の変更をもたらすのだろうか。他面では世界的にも、アジアにおいても、地政学上の一極として中国が台頭したことは、今後、アジア研究に必ずや影響するだろう。しかし、この新しい条件によって、中国ばかりでなく、より広範なアジアの研究の発展も急がれるようになっていないのだろうか。こういった新しい条件のインパクトを語るのは、恐らくまだ早すぎる。ともあれ、今日のアジアはオリент学を生んだ植民地時代とも、地域研究を必要としていた低開発の国々とも、まったく違っているのである。

(Thongchai Winichakul／アジア経済研究所 新領域研究センター)